

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00643

研究課題名（和文）「コロナ状況」下で育まれる芸能 危機への応答・身体性をめぐる交渉・社会との関係

研究課題名（英文）Performing arts nurtured in the "Time of Corona": Response to the crisis, negotiation on physicality, and their positions in each society

研究代表者

吉田 ゆか子 (Yoshida, Yukako)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：00700931

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：COVID-19感染拡大は、学校での音楽教育、奉納舞踊、ストリップまで、ありとあらゆる芸能実践に影響を及ぼした。他方で、ジャンルの特性や、社会的ポジション、（プロかアマか等）上演者側の事情によっても、その影響の仕方は異なっていた。多様な専門の研究者が共同研究を行ったことで、そういった違いについても議論し、コロナの影響を多面的に明らかにした。コロナ状況下では上演そのものだけでなく、観客との関係の維持、練習の継続、活動組織の維持、保存技術（楽器作りなど）の保全などの点で課題があり、それに対し人々が多様な工夫をしている様子が明らかになった。この最終的な成果は2024年度に論集として出版される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、COVID-19のパンデミック下での芸能の状況を同時代的に記述・撮影し、貴重な記録を残した。感染拡大という、芸能を取り巻く環境の大きな変化のなか、人びとが、様々な工夫を凝らしながら、ある種即興的に対応し、活動や活動グループや拠点を維持する創造的なプロセスがあった。またパンデミックは、芸能の社会的な周縁性を表面化させた一方で、芸能のもつ、他では代替できない楽しみや役割を浮かび上がらせる契機でもあった。こうした人びとの創造性やパンデミックの両義的な面を捉えたことの意義は大きい。成果は、各種の論考のみならず、映像記録や映像民族誌、芸能上演イベントとしても公開され、一般社会へも共有された。

研究成果の概要（英文）：The spread of COVID-19 affected all performing arts practices, from music education in schools to dedicatory dances and stripping. On the other hand, the ways in which the spread of the disease affected the performing arts differed depending on the characteristics of the genre, its social position, and circumstances of the performers (professional or amateur, etc.). This joint research conducted by researchers with diverse specialties allowed us to discuss these differences and clarify the impact of corona from multiple perspectives. There were challenges not only in terms of the performances, but also in terms of maintaining relationships with the audience, continuing practice, maintaining the organization of activities, and preserving conservation techniques (such as making musical instruments). The study revealed how people were devising various ways to deal with these challenges. The final result will be published as a book (in Japanese) in 2024.

研究分野：文化人類学

キーワード：COVID-19 芸能 身体 災害 ステイホーム 劇場 学校教育 伝統の伝承

1. 研究開始当初の背景

新型コロナ感染症のパンデミックのもと、人々は行動変容を促され、人間関係や身体を取り囲む物理的な環境も再編されつつある。ウイルスの存在を前提として生きるこうした状況（これを本研究では「コロナ状況」と呼ぶ）は、世界中の音楽、舞踊、演劇などの芸能（パフォーマンス・アーツ）に大きな影響を与えてきた。

他方芸能に関わる研究においては、上演を演奏者やダンサーや振付家や役者といった卓越した表現者個人の作品として見るのではなく、人と人、人とモノ、人と環境の関わりの中で芸能が織りなされるプロセスの重要性が論じられるようになっていた。例えば文化人類学の吉田は、芸能を多様な人とモノの相互媒介的な働きかけのなかで紡ぎだされる営みとして捉えなおした（吉田 2016『バリ島仮面舞踊劇の人類学 人とモノの織りなす芸能』）。また舞踊学の武藤は、ダンスが地域共同体の社会関係、生活様式、慣習や信仰、そして自然環境との関わりの中で踊られる様に着目し、舞踊を生成するそれら諸関係の総体を「舞踊の生態系」と呼んでいる（武藤 2018「舞踊の生態系に分け入る」『群馬県立女子大学紀要』第 39 号）。このような学術潮流のなか、コロナ状況下の芸能の考察は特別な重要性を帯びてくる。なぜなら、コロナ状況下では、人びとが他者の身体やモノや環境から切り離されたり、人びとの社会関係や生活様式が再編されたりする、いわば芸能の「生態系」の大きな変動が起きているからである。

2. 研究の目的

新型コロナウイルスに影響されながら過ごすこの「コロナ状況」は、世界の芸能（音楽、舞踊、演劇）の上演と伝承をどのように変えているのだろうか。疫病退散のために上演される芸能もあれば、オンライン上演で生まれる新しい表現もある。また芸能は不要不急とされがちで、その社会的意義が問い直される契機も多かった。本研究は、日本を含む東アジアおよび東南アジアの具体的な事例を検討しながら、コロナ状況の芸能への影響を明らかにするとともに、コロナ状況のなかで変容する芸能の姿を地域・ジャンル横断的に検討することで、我々の芸能や芸能実践を行う身体についての理解を深めようとするものである。また、上記の 2 つの問いに答えるために、A.このコロナ状況に対し芸能がどのように応答しているのか。B. 感染予防策がとられるなか、芸能はどのように上演・伝承され、またその身体性はいかに交渉されているのか。C. 感染拡大状況下における芸能と社会の関係の問い直し。の 3 点に特に注目してゆく。

3. 研究の方法

(1) 芸能実践についてのオンラインおよび現地調査の実施、(2) メンバーを中心とした研究会における中間報告と討論、の 2 つを柱に研究を進めた。なお(2)の研究会は、本科研のメンバーから構成される AA 研共同利用・共同研究課題「新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究」との共催であった。

また、メンバーが行っている調査に、別メンバーが参加する機会も設けることで、研究手法やコロナ状況下の芸能実践に関する情報を共有する機会も設けた。途中からアジアとの比較のために、欧米の舞台芸術の研究者を、そして芸能と視覚芸術の比較のために芸術人類学の研究者を分担者として追加した。

4. 研究成果

それぞれのメンバーは主に以下のようなテーマで調査を進め、それぞれ研究会等にて発表した。

- 吉田ゆか子 インドネシア・バリの芸能、特にステイホーム期の映像作品やライブ配信
- 神野知恵 伊勢大神楽と地域の人々の相互関係性
- 前原恵美 日本の伝統芸能の状況推移、また三味線づくりなど保存技術の危機
- 増野亜子 日本におけるインドネシア芸能の活動、特に場所、空間、環境との関わり
- 小塩さとみ 日本の学校における音楽教育活動と、地方都市におけるコンサート活動
- 竹村嘉晃 シンガポールにおけるインド系芸能団体の活動と生徒との関わり合い
- 大田美佐子 欧米の劇場での舞台公演と文化政策
- 長嶺亮子 台湾の学校における音楽実践と、民俗行事における芸能実践
- 武藤大祐 日本のストリップ劇場、特に「本質的に不健全」とされたその社会的周縁性の影響

- 緒方しらべ アフリカの視覚芸術のアーティストの創作活動
- 阿部武司(研究協力者) 東北地方の民俗芸能の現状、特にその映像記録
- 鈴木正崇(研究協力者) 御柱祭、アマビエをテーマとした新作能、および疱瘡舞

プロジェクトの前半は、海外渡航も難しく、オンライン調査を活用するなどの工夫が必要であったが、各メンバーは上述のテーマに沿ってCOVID-19のパンデミックを同時代的に記述・記録し、貴重な資料を残した。感染症拡大は、学校での音楽教育から、奉納舞踊、ストリップまで、ありとあらゆる芸能実践に影響を及ぼした。他方で、ジャンルの特性や、社会的ポジション、(プロかアマか等)上演者側の事情によっても、その影響の仕方は異なっていた。今回多様なジャンルについて、多様な専門の研究者が共同研究を行ったことで、そういった違いについても議論し、コロナの影響を多面的に明らかにすることができた。またたとえば、前原の扱った舞台上演を中心とする日本の古典芸能ジャンルと、神野が取り上げた、家々を渡り歩く伊勢大神楽では、観客との交流の時間や距離、そして練習の位置づけが大きく異なり、それによって新型コロナの影響が大きく異なる一方、上演の機会や規模が制限されることで若手の出番や元々上演の少なかった演目のお披露目の機会が減少するなど、共通する問題点が多々あることもわかった。

また、いかに上演するかということだけでなく、観客との関係の維持、練習の継続、活動組織の維持、保存技術(楽器作りなど、芸を支える諸技術)の保全などの点で様々な課題があった。調査からは、それに対し人々が多様な工夫をしている創造的なプロセスが明らかになった。またパンデミックは、芸能の社会的な周縁性を表面化させた一方で、芸能のもつ、他では代替できない楽しみや役割を浮かび上がらせる契機ともなった。

以下に上述のA~Cの課題とそこから派生するいくつかのトピックについての暫定的な成果を報告する。

A. 感染拡大の危機に対する芸能の応答

芸能は天災や疫病など、様々なハザードやリスクに対する人間からの応答の一つの形でもある。この機能は、今回どのように果たされたのだろうか。たとえば、吉田の注目していたバリ島においては、疫病払い、悪霊払いの機能をもつ舞踊が存在している。しかし、今回のパンデミック初期には、それらの芸能が特別に活性化するという現象は見られなかった。家に籠ることが奨励され、一定以上の人数で集うことに制限があったなかで、そうした活動を行うこと自体が難しかったからである。他方で、オンラインで配信された「世俗の」コメディ劇のなかでは、笑いによって人びとのネガティブな感情を吹き飛ばし、免疫力を高めてウイルスに打勝とうとする事例もあり、従来とはまた違う形で芸能を通じて危機を乗り越えるための役割を担おうとする芸能者たちの姿があった。

他方、定期的に行われていた厄払い等の機能をもつ芸能の場合、それ以外の芸能の多くが活動を止めているなかで、活動を続けられたという例はあった。例えば伊勢大神楽もその一つで、恒例行事を続けることの安心感が迎え入れる側から聞かされた。日本の東北の民俗芸能では、軒並み芸能のイベントがキャンセルされるなか、疫病退散というテーマを掲げることで上演が可能となったケースがあることも、研究協力者の阿部の調査のなかで指摘された。コロナ状況によって芸能の病や厄と対峙するというテーマに注目が集まった面もある。研究協力者の鈴木が取り上げた、アマビエをテーマにした新作能や、疱瘡舞の伝承活動の活性化はその際立った例といえる。

B. 感染予防策がとられるなかでの芸能の上演・伝承

各メンバーの調査からは、感染対策と芸能活動を両立するための実に多種多様な工夫の実例が明らかになった。マスクの着用や、距離をいつも以上に確保しての練習や本番といったジャンル横断的に広くみられるものから、伊勢大神楽における、人の頭の代わりに人型の切り紙を獅子舞で噛む新しい演技や、教室に来られず楽器へのアクセスがない学生のための、紙の鍵盤を用いたオンライン・ピアノレッスンなど、各現場で個人や団体が個別に模索した対策もあった。日本の大学での音楽実技教育を調査した小塩によれば、そうした紙鍵盤では、どのように指を使っているのかがよく見えるといった意外なメリットが発見されたが、上級者になると、現場で音を共有していないことのデメリットが大きくなるという。このようにそれぞれの状況において様々な調整が常に必要となる。

今回扱われた事例の中にはいわゆる伝統芸能も多かったが、感染予防と芸能実践を両立しようとする様々な営為の報告からは、伝統の伝承とは単なる反復ではなく、取り巻く環境の変化に翻弄されつつ即興的に対応する、ダイナミックなプロセスが含まれているものであることも理解される。

また多くのメンバーたちの調査からは、距離をとったり、身体接触を避けたり、飲食を避けたりといった感染対策をしながら活動を続けることで、いかに芸能の上演や練習においてそうした濃厚な身体的関わりが重要であったのかが、実践者や観客に強く意識される契機となったことが明らかになった。後述するように練習や上演をオンライン化することによって活動を継続できた例は多々あるが、そのなかで、オンラインでは代替できない芸能の部分も実感された。

なお、自身の声を多重録音しながらガムラン音楽をつくる「ロガムラン (gamelan mulut)」の作品がバリ島で注目をあびるなど、人と集えない、移動できないといった制約を逆手にとった表現・作品の事例もみられた。

B-1. 芸能上演や伝承のオンライン化がもたらした新たなつながりや学び

オンラインを用いた上演や伝承(練習)は、様々なジャンルで試みられた。そのなかで、オンラインで対面レッスンや上演を代替するだけでなく、新たな活動や関係性の構築に役立てる動きもあった。竹村が調査した、シンガポールにおけるインド系コミュニティでは、オンラインレッスンによってこれまでに教室に通えなかった層が学び始めたり、インドの舞踊文化に関する座学のレッスンを行うことで、祖国インドの文化に触れ、また芸術団体の創設者たちの経験を共有したりする機会がもたらされたという。また、上演がオンライン配信されることで、インドや、欧米のインドコミュニティの観客とつながり、評価を得るなど、地域を超えた関係性の構築がなされる現象が見られた。

配信や、クラウドファンディングなどを通じ、オンラインによって、遠方の観客からの支援を受け、芸能の窮状を打破しようとする動きもあった。カンボジアの大型影絵を支援するプロジェクトはその一例で、日本在住の個人から資金を募り、感染が落ち着いてからカンボジアの学校でのワークショップと上演を実現した。

C. 感染拡大状況下において芸能と社会の関係はどのように問い直されたか

コロナ状況下では多くの芸能が「不要不急」とされ、芸能の社会的周縁性が際立った。ただしそれぞれの社会において、またジャンルによっても、その周縁性の度合いや質は異なる。鈴木が調査した御柱祭りやそれに付随する芸能は、地域の人びとの多大なる支持の元でどうにか開催を実現したが、増野の注目した、日本の社会人グループによるインドネシア芸能の実践は、日本の中で儀礼上の位置づけも持たず、また学校教育など社会的な位置づけを持たないゆえの、活動の維持の難しさがあった。また、武藤は、「本質的に不健全」とされ、劇場や踊り子たちは休業補償の対象にならなかった(ゆえに営業を続けざるを得なかった)ストリップの現場を調査した。

そうして突きつけられた周縁性について、芸能者や観客たちは多様に応答してきた。ストリップ劇場では、観客同士で協力して感染を防ぎ劇場を守ろうとする実践が見られた。また大田による欧米および日本の劇場の研究でも、この逆境を創作の力に変え、社会における劇場の役割を果たそうと、新たな表現を模索した舞台作品の例が収集・分析された。

C - 1 . 居場所としての上演場や練習場

芸能者たちが集まり、また観客を集めることを回避する社会的な動きのなかで、逆説的に、集い、共に活動する、あるいは共に鑑賞するという芸能の営みの重要性が人びとにとって感じられる契機となった。ストリップ劇場について武藤は、劇場がもつ「居場所」としての性格がコロナ禍で鮮明になったと論じている。また増野は、一切の上演ができなくなった時期も、メンバー同士で練習をしたり、おしゃべりをしたり、時には掃除だけをするために集い続け、それを楽しんでいたインドネシア芸能の上演グループに注目している。

D . 危機の顕在化の契機

これまで新型コロナウイルス感染症の芸能への影響や芸能の側からの応答について述べてきたが、一見コロナ状況を理由に行われていること(延期、縮小、あるいは逆にコロナ退散を願った上演の活性)も、その他の様々な要因と絡まり合っており、因果関係を単純化してしまうことには危険があるという点は重要である。例えば、コロナ状況下において活動が停滞しているように見える行事や芸能は、コロナ状況以前から過疎化や演者の高齢化等、別の要因で伝承の難しさを抱えていたというケースもあり、コロナ状況はそれをより顕在化させたとみる方が適切な場合も少なくない。これまでやや無理をしながら伝承してきた芸能グループがこの機に解散したという事例も報告されており、新型コロナウイルス感染症は、芸能実践がもともと潜在的にもっていた困難や危機的状況を表面化させたといえることができる。

ただし、芸能の脆弱性が可視化されることがポジティブな動きへとつながる可能性もある。コロナ状況下での芸能活動の困難に注目が集まるなか、三味線製造者の廃業が報道され、三味線製造や三味線を用いる芸能の窮状が表面化したという事例もあった。前原によれば、三味線製造

の危機はコロナが原因というわけではないのだが、コロナ状況下で人々の目が向き、その結果一部支援の活動も始まったという。

感染状況が落ち着いて生活が元に戻りつつあった本研究プロジェクトの最後の時期には、「3年ぶりの開催」などとして、東北の芸能イベントや祭りが活性化していることも報告された。バリ島でも、祭りで奉納される舞踊や演劇にいつも以上に参加者が集まるなど、芸能への熱の高まりがみられた。これが、一過性のものなのか、今後も継続して調査してゆくことの重要性も確認された。

こうした成果の一部は、国際学会 International Council for Traditional Music (ICTM)において、パネル「Struggles and Creativities in Performing Arts under the Spread of COVID-19: Cases from Japan, Singapore, and Indonesia」として発表された。また一般向け雑誌『Fieldplus』へも巻頭特集「コロナ状況下のアジアで舞う・奏でる・演じる」として寄稿され、オンラインで閲覧可能となっている (<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/field-plus/29>)。また、研究会の毎回のまとめは、AA 研ウェブサイト <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp274> に掲載されている。アウトリーチを含む主な活動については、科研費プロジェクトで作成したウェブサイトで報告しているので、そちらも参照されたい (<https://covid19performance.aa-ken.jp/>)。

最終的な成果を本年度中に論集『コロナ下での芸能実践 - 場とつながりのレジリエンス(仮)』(春風社)として出版するため、現在準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 18件）

1. 著者名 鈴木 正崇	4. 巻 97
2. 論文標題 宗教民族学と総力戦体制	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 201~226
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20716/rsjars.97.2_201	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木 正崇	4. 巻 153
2. 論文標題 修験道儀礼と芸能—鳥海山の事例から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 157-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 前原 恵美	4. 巻 3
2. 論文標題 新型コロナ禍における日本の無形文化財	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日韓無形文化遺産研究	6. 最初と最後の頁 131-138/146-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大田美佐子	4. 巻 2022
2. 論文標題 関西地域のオペラ活動2022	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本オペラ年鑑 2022	6. 最初と最後の頁 74-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 緒方しらべ	4. 巻 47(3)
2. 論文標題 ビーズ細工を仕事にする：ナイジェリア南西部ヨルバランドで生きる人びと	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長嶺亮子	4. 巻 46(4)
2. 論文標題 祈る、奏でる、歌う、再生する：信仰と音声再生機	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美、橋本かおる	4. 巻 6
2. 論文標題 楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 無形文化遺産研究報告	6. 最初と最後の頁 25～39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18953/0002000007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美	4. 巻 4
2. 論文標題 伝統芸能へのコロナ禍の影響調査報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム4「伝統芸能と新型コロナウイルス これからの普及・継承」報告書	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美	4. 巻 4
2. 論文標題 結びにかえて コロナ禍でつかんだ多様な軸	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム4「伝統芸能と新型コロナウイルス これからの普及・継承」報告書	6. 最初と最後の頁 89-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 神野知恵	4. 巻 182
2. 論文標題 マウルクッは生きている 韓国全羅道の村祭りの現在	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 68 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野知恵	4. 巻 190
2. 論文標題 農楽の力、人の力	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国楽ヌリ(韓国)	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田 ゆか子	4. 巻 29
2. 論文標題 コロナ状況下のアジアで舞う・奏でる・演じる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Field+ : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌 / 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 [編]	6. 最初と最後の頁 2~3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/125328	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長嶺 亮子	4. 巻 29
2. 論文標題 コロナ状況下の台湾の芸能と防疫 「密」を取り戻すために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 FIELDPLUS : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌	6. 最初と最後の頁 4~5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/125329	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹村 嘉晃	4. 巻 29
2. 論文標題 インド芸能をめぐるコミュニケーションの変容 コロナ状況下のシンガポールを事例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 FIELDPLUS : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌	6. 最初と最後の頁 6~7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/125330	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小塩 さとみ	4. 巻 29
2. 論文標題 学びの場における音楽活動 「密」をさける難しさをどう乗り越えるか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 FIELDPLUS : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌	6. 最初と最後の頁 8~9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/125331	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 神野 知恵	4. 巻 29
2. 論文標題 コロナ状況下の日本で伊勢大神楽を撮る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 FIELDPLUS : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌	6. 最初と最後の頁 10~11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/125332	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 正崇	4. 巻 42
2. 論文標題 成田山門前町の祭りの変遷 湯殿山権現祭から成田祇園祭へー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教学論集	6. 最初と最後の頁 3-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 正崇	4. 巻 151
2. 論文標題 出羽三山の開山伝承 『羽黒山縁起』を中心としてー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 221-253
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ako Mashino	4. 巻 16
2. 論文標題 Performing Arts in Procession as a Contact Zone for Muslim and Hindu Balinese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究	6. 最初と最後の頁 3~20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/282867	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田ゆか子	4. 巻 46(2)
2. 論文標題 上演を紡ぐ人とモノ : マテリアリティの人類学と上演芸術の研究の交差点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 223-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増野亜子	4. 巻 46(2)
2. 論文標題 パリの歌舞劇アルジャにおける有形と無形 冠、身体、ストック・キャラクター	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 277-307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木正崇	4. 巻 36
2. 論文標題 山岳信仰と仏教	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 公益財団法人 松ヶ岡文庫研究年報	6. 最初と最後の頁 15-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木正崇	4. 巻 149
2. 論文標題 女人禁制と山岳信仰	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 145-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美、橋本かおる	4. 巻 16
2. 論文標題 楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告5	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 無形文化遺産研究報告	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美、久保田裕道	4. 巻 11
2. 論文標題 研究動向：日本の無形文化財および政策の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 無形遺産	6. 最初と最後の頁 178-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計31件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 10件）

1. 発表者名 武藤 大祐
2. 発表標題 郷土芸能の拡散と収斂 ポストコロナの朽木古屋六斎念仏踊り
3. 学会等名 舞踊学会第75回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武藤大祐
2. 発表標題 ストリップとCOVID-19の共生 「本質的に不健全」な芸能の現場
3. 学会等名 舞踊学会第26回定例研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小塩 さとみ、田中 多佳子、金光 真理子、山本 百合子
2. 発表標題 音楽科教員養成における多様な音楽文化体験の実践と課題
3. 学会等名 日本教育大学協会全国音楽部門第48 回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前原 恵美
2. 発表標題 日本の無形文化遺産と新型コロナウイルス禍
3. 学会等名 Asia-Pacific Regional Conference ' ICH Resilience and the COVID-19 Pandemic ' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前原 恵美
2. 発表標題 三味線修理・製作技術とコロナ禍
3. 学会等名 Asia-Pacific Regional Conference ' ICH Resilience and the COVID-19 Pandemic ' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大田美佐子
2. 発表標題 クルト・ヴァイルの社会派音楽劇と社会的メディアとしての音楽劇
3. 学会等名 早稲田大学総合研究機構 オペラ / 音楽劇研究所 第210 回研究例会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takemura Yoshiaki
2. 発表標題 Female Performers Mobility and its Politics in Singapore in the 20th century: Propagation Layers, the States and Multiculturalism
3. 学会等名 European Conference for South Asian Studies (ECSAS) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神野 知恵
2. 発表標題 家をまわる芸能の在り方を考える～伊勢大神楽を中心に～
3. 学会等名 大阪府立図書館講座
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神野 知恵
2. 発表標題 韓国における女性農楽団の再評価～地域、ジェンダー、ジャンルを越えた芸能～
3. 学会等名 日本民俗学会年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉田 ゆか子
2. 発表標題 芸能と場所 ジャカルタ首都圏におけるバリ舞踊実践を事例に
3. 学会等名 日本文化人類学会第58回研究大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Mashino Ako
2. 発表標題 Sanggar: A Contemporary Platform for the Evolving Tradition of Balinese Gender Wayang
3. 学会等名 5th International Music and Performing Arts Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshida Yukako
2. 発表標題 Impact of the COVID-19 Pandemic on the Balinese Masked Dance Theater Topeng: A study on experiences of performers and mask makers
3. 学会等名 7th Symposium of the ICTMD Study Group on Performing Arts of Southeast Asia Study Group Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yoshiaki Takemura
2. 発表標題 Performing Arts Practices and Experiences during the COVID-19 pandemic: Indian Diaspora, Technology, and Engagement in Singapore
3. 学会等名 The 46th International Council for Traditional Music (ICTM) World Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ako Mashino
2. 発表標題 Struggling for space, sustaining place: A case study of Indonesian performing arts in Japan during the pandemic.
3. 学会等名 The 46th International Council for Traditional Music (ICTM) World Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Emi Maehara
2. 発表標題 Overlooked Impact of the COVID-19 on Japanese Traditional Performing Arts
3. 学会等名 The 46th International Council for Traditional Music (ICTM) World Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yukako Yoshida
2. 発表標題 Balinese Performing Arts in the Early Stages of the COVID-19 Pandemic: Comfort, Edification, and Prayer
3. 学会等名 The 46th International Council for Traditional Music (ICTM) World Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Emi Maehara
2. 発表標題 Post-Pandemic Restoration of Japanese Traditional Performing Arts from the Perspective of Conservation Techniques
3. 学会等名 INTERNATIONAL CONFERENCE ON INTANGIBLE CULTURAL HERITAGE2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 前原恵美
2. 発表標題 伝統芸能へのコロナ禍の影響調査報告
3. 学会等名 無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム4「伝統芸能と新型コロナウイルス これからの普及・継承」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 前原恵美
2. 発表標題 楽器の原材料や製作技術の調査について
3. 学会等名 人新世と人文学公開講演「人新世と人文学」セミナーシリーズ(第6回)公開講演会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshiaki Takemura
2. 発表標題 From Ritual to Performing Arts : Mobility and the Transition of Research Subjects
3. 学会等名 Seminar at the Department of History, Savitribai Phule Pune University (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ako Mashino
2. 発表標題 Performing Arts in Procession as a Contact Zone for Muslim and Hindu Balinese
3. 学会等名 京都大学イスラーム地域研究センター国際ワークショップ “The Encounter with Religious Others through the Music and Musician in Islamic World” (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 島嶼海岸地域における巡回芸能集団伊勢大神楽の活動
3. 学会等名 韓国 木浦大学島嶼文化研究所セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽をモチーフとしたわらべうたの伝承
3. 学会等名 東洋音楽学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木 正宗
2. 発表標題 成田山門前町の祭りの変遷 湯殿山権現祭から成田祇園祭へ
3. 学会等名 日本山岳修験学会・日本宗教民俗学会合同例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木 正宗
2. 発表標題 山岳信仰と修験道
3. 学会等名 飯田市美術博物館公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 増野 亜子
2. 発表標題 舞踊化したシラット パリ・ムスリムの芸能ルダットにおける音と身体動作
3. 学会等名 インドネシア研究懇話会第三回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 児玉竜一；三浦裕子；前原恵美
2. 発表標題 オペラとコロナ禍における研究機関の取り組み
3. 学会等名 第29回楽劇学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田ゆか子
2. 発表標題 COVID-19と芸能 - 感染拡大初期のインドネシア・バリ島の事例から
3. 学会等名 第16回四大学連合文化講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前原恵美
2. 発表標題 「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」現状報告
3. 学会等名 【シリーズ】無形文化遺産と新たらコロナウイルス フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルス：Good Practiceとは何か」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小塩さとみ、金光真理子、増野亜子、山本百合子
2. 発表標題 伝統芸能における身体技法の教授の場を考える
3. 学会等名 東洋音楽学会第125回東日本支部定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽とコロナ禍の日本を歩く
3. 学会等名 2021年度 第1回フィールドサイエンス・コロキウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 宮入 恭平、増野 亜子、神保 夏子、小塩 さとみ	4. 発行年 2024年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 256
3. 書名 コンクール文化論	

1. 著者名 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京	5. 総ページ数 64
3. 書名 伝統芸能に特化した都内会場の休館に関する調査報告書	

1. 著者名 Mayco A. Santaella ed.	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 378
3. 書名 Performing Arts and the Royal Courts of Southeast Asia Volume 2	

1. 著者名 増野亜子（野澤 豊一、川瀬 慈編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 アルテスパブリッシング	5. 総ページ数 312
3. 書名 音楽の未明からの思考	

1. 著者名 前原恵美（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、後藤隆基編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春陽堂書店	5. 総ページ数 320
3. 書名 ロスト・イン・パンデミック 失われた演劇と新たな表現の地平	

1. 著者名 竹村嘉晃（三尾稔編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 南アジアの新しい波 下巻	

1. 著者名 粟本 英世、村橋 勲、伊東 未来、中川 理、加藤 敦典、賈玉龍、李俊遠、森田 良成、椿原 敦子、岡野 英之、上田 達、木村 白、早川 真悠、藤井 真一、竹村 嘉晃	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 かかわりあいの人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

踊り/ダンスとオリンピック・パラリンピック（武藤大祐著） https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/olypara2021_series2 琵琶製作の記録（短編）石田克佳（前原恵美監修） https://www.youtube.com/watch?v=9cVq4jMWZVY 琵琶製作の記録（長編）石田克佳（前原恵美監修） https://www.youtube.com/watch?v=ouCrja4gMmc 大鼓の革製作の記録（短編）畑元 徹（前原恵美監修） https://www.youtube.com/watch?v=emI2A65kbtY 伊勢大神楽とコロナ禍の日本を歩く（神野知恵著） https://fieldnet-aa.jp/covid19/area/asia/ 『コロナ状況』下で育まれる芸能 危機への応答・身体性をめぐる交渉・社会との関係 https://covid19performance.aa-ken.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	増野 亜子 (Mashino Ako) (50747160)	東京藝術大学・音楽学部・講師 (12606)	
研究分担者	武藤 大祐 (Muto Daisuke) (30513006)	群馬県立女子大学・文学部・准教授 (22302)	
研究分担者	神野 知恵 (Kamino Chie) (20780357)	岩手大学・人文社会科学部・准教授 (11201)	
研究分担者	大田 美佐子 (Ohta Misako) (40362751)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	長嶺 亮子 (Nagamine Ryoko) (30589784)	沖縄県立芸術大学・芸術文化研究所・研究員 (28001)	
研究分担者	小塩 さとみ (Oshio Satomi) (70282902)	宮城教育大学・教育学部・教授 (11302)	
研究分担者	前原 恵美 (Maehara Emi) (70398725)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・室長 (82620)	
研究分担者	竹村 嘉晃 (Takemura Yoshiaki) (80517045)	平安女学院大学・国際観光学部・准教授 (34202)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	緒方 しらべ (Ogata Shirabe) (10752751)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員 (12603)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鈴木 正崇 (Suzuki Masataka) (10126279)	慶應義塾大学・名誉教授 (32612)	
研究協力者	阿部 武司 (Abe Takeshi)	東北文化財映像研究所・所長	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関